

「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから 20 年⑫

今年も「タイ環境学習ツアー」が行われた。今回もこのツアーになくはならないタイ在住の若林卓司さんの協力で有意義なツアーが実施できた。この場を借りてお礼申し上げたい。さらに、9 月末に頼もうとしていた原稿が送られてきた。なんとということか。小菅村での INCH まつりでギター抱えて歌っていたときに願っていたことが、家に帰ってパソコンを開いたら現実になったのだ。願ってみるものである。

今年も 8 月 9 日昼ごろに成田を発ち、夕方 6 時半ごろバンコクに着いた。チナタッタさんが出迎えてくれて、いつものラジャバト・プラナコーン大学内にあるプラナコーン・グランドビューホテルまで送ってくれた。夕食は？まだ。ということで近くのレストランへ連れて行ってくれ一緒にビール片手に夕食となった。いつものうれしい接待を受けた。

翌日、10:00 にチャトチャ公園で若林夫妻と待ち合わせ。フロントにホテル開設当時からの今では顔見知りとなった彼に(名前は知らないのだが、彼の妹さんもこのホテルに勤務している)タクシーを呼んでもらい 3 人で向かった。

ここから先は、若林さんの含蓄のある文になる。日記という形を借りて、事実に基づいた随筆である。尚、文中の写真は私が撮影したもので、私の主観で適当に入れてある。(中込卓男)

「タイ環境学習ツアー 2019」 その①

若林 卓司 日記から

8 月 10 日

ゴミ、ゴメ、ゴウの三人がチャトチャ公園の待ち合わせの場所に来たとポンティップから電話があったとき、私は 5 キロを走り終わり、例の運動公園で腕力トレーニングをしているときだった。それを済まして約束の場所に行くと、いない。元の場所まで戻ると、すでにいた。



▲ジョギングを日常欠かさない若林さん

今日はシリキット公園でのタイの母の日のイベントに行くことにしていたが、まずはロットファイ公園のフクロウを案内した。いつもいる二か所にちゃんといてくれたので、写真も撮ることが出来た。巣穴から顔を出したインドコキンメフクロウはなかなか愛嬌のある顔をしていると思う。



その後、シリキット公園へ行ったが、去年に比べて、店も少なく、展示も精彩を欠いていたように思うが、試食試飲が多かったので、3 人には楽しんでもらえただろうか。ダーラーの花から作った飲み物、靈芝を煎じたもの、山岳民族のコーヒー等。



次に JJ モールへ行って、ペッチャブーンの特産品展を冷やかした。この県の特産品はタマリンドである。ゴメさんとポンティップがそのタマリンドの加工品を買っていた。

腹が減って来たので、私たちがよく行く店に行つて、昼を食べ、さらにロート・シヨンの店に行つてデザートを食べた。このデザートは 3 人とも気に入ったようだ。



▲込み合っている他人気店。左から剛くん、ゴミさん、手前が若林さんの奥さん A さん



ロート・シヨン

それからさらに、オートコーへ行った。ここでもゴミさんはパクチーの種を買っていた。

夕方チンナタット先生と約束があるという 3 人とチャトチャのマーケットのバス停でわかれ、私たちはバスに乗って駐車場に戻り、コンドーに帰った。

剛くんが少々お腹を壊しているようなので、のんびりホテルで過ごし、18:00 にホテルでチンナタットさんと合流していつもの「タウンデー・シャーマン・ブリュワリー」というビアホールに行った。剛君はホテルで休むことにした。



ウタイタニーのジャングルから帰って帰国直前にこのビアホールで飲むことが多いが、今回は日程的に旅の始まりである。それとは関係なく 3 リットルのピアタワーをたて 3 人で飲みほした。旅の始まりを祝う宴であった。

ウタイタニー 2019

8 月 11 日

9 時過ぎにタクシーでプラナコーンまで行き、その食堂で朝ご飯を食べた。ホテルで 3 人に会って、そうこうしているうちにバンでポータンさんとパンダが迎えに来た。ウタイタニーに向けて出発である。いつものようにスパンブリーのロータスで買い物。ゴミさんのする理科遊び用の材料を買い、毎年恒例のサンダル買いも済ませたが、ビールは時間制限があって、自主的に買うのをあきらめた。

ポータンさんがダーンチャーンに美味しい魚料理の店があるというので、そこで食べることになったが、ここにはダム湖があるというので、まず、そちらへ先に行った。こんなところにダムがあるとは知らなかったが、バンの運転手も初めてだといっていた。



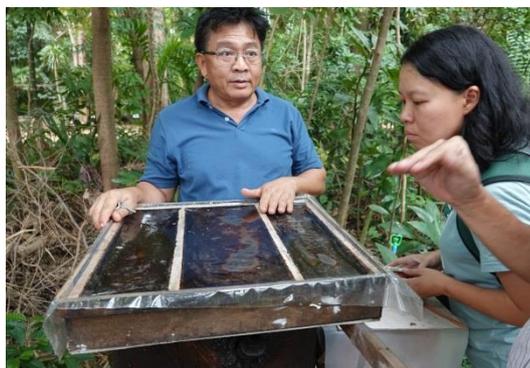
クラ・シアオダムといって、開放的な風景が楽しめるところだった。湖上に筏が浮いており、その上に小屋があるのは昼夜で魚を取るらしい。

昼は「オートポーデン」という店で食べた。しゃれた感じの店で、細い路地を奥に入ったところにあつて、思わず「注文の多い料理店」のいい店は大通りに面したところにはないというような文面を思い出した。

プラー・サリット、プラー・タップティムの魚料

理はおいしかったが、デザートに出たロート・ションもなかなかいける味だった。

バーン・ライの町で大量のビールを買って、パンダキャンプに着いたのは 4 時ごろになった。途中何度か強い雨に出会ったが、雨はすっかり上がった。シリポンさんとは何度も電話で話しているが、キーさん、イエンさん、ノーイさんも元気だった。また、カンペンセーンにあるカセサート大学で勉強しているダン（デン）も帰っていた。さっそく、シリポンさんがハリナシバチの巣を案内してくれた。



▲ハリナシバチの巣を見せるシリポンさん

8 種、50 ほどの巣があるといっていたが、ここ 1 年のうちによくここまでしたなと思った。

夕食は料理上手のキー・イエンのコンビが作ったもので、毎年楽しみの一つである。



▲パンダキャンプでの食事。この料理を食べるためにまた来たいという人もいる

コーヒーを飲んでしていると、シリポンさんがハリナシバチの花粉、プロポリスを入れてくれるので、何を飲んでいるのか分からなくなるほどのありがたい味になった。

その夜は遅くまで話したが、いろいろ話したので、どんな話をしたか忘れてしまった。シリポンさんの

ハリナシバチの話やノーイさんのこの頃、果樹を食べにくるコウモリをカスミ網で捕まえるようになったが、鳥も一緒に捕まるので、それらを食べることがこの辺りで一種の流行になっているという話などだったと思う。

8月12日

朝、パンダキャンプの中を鳥を探して歩いたが、去年のようにミナマイロチョウにはお目にかからなかった。昨日からアカハラシキチョウの見事な歌声を聞いていたが、今朝もいい声を聞かせてくれた。

朝はシリポンさんがハリナシバチの中でも大型の *Genio trigona thoracica* の蜜を、最近買った機械で吸い出すというのでついていった。ダンが機械を操って、少し吸蜜が出来た。



飲ませてもらうと、それほど酸っぱくなかった。シリポンさんによれば、種によっては酸っぱいばかりじゃないそうだ。

そんな話をしているうちに、ノーイさんがカスミ網で取ったものを持って来た。



問題の果物食の何匹かの小型のコウモリその他、ミドリサトウチョウ二羽（死んでいた）、ヨーロッパコノハズク 2 羽。



ノーイさんがコノハズクを私に渡すので、私は両手に一羽ずつ持つことになり、記念に写真を撮ってもらった。ポンティップもそうしてもらったが、コノハズクは生きているので、逃がすようにノーイさんに強くいった。1羽はすぐに飛び去ったが、後の1羽は飛ばず、下に落ちたり、ノーイさんが上に放り上げたりして、長くパンダキャンプにいたが、暗くなったら飛び立つとノーイさんが言うように、実際そのようになった。

この日の朝はこのようにざわざわしていたが、一番重要なワークショップのある日だ。もう学生が来出していた。

朝のスケジュールはゴメさんの番である。学生は小学校の高学年。今日は祝日なので、学生が集まるかどうかわからなかったの、いろいろな人をお願いしたら、結局60人を超えることになったという。これにビビったのがゴメさんだったが、心の整理をし、勇ましく課題に立ち向かった。

最初はボール紙と輪ゴムを使った跳躍の遊び。次はアイスクリーム作り。ここで休憩が入り、最後はスライム作り。



ゴメさんの理科遊びは、ガラス玉を使った顕微鏡のように、ウタイタニーに限らず、他県にも広まったものもあるが、普通は何でもない遊びをやって、それでいてすごく子供を引き付けるものである。子供の真剣な顔、成功したときの嬉しそうな顔、それを見ているだけでも意味があると思う。

今回は学生の数が多いので、日本人一行、シリボン家、私ら二人総出で実験の手伝いをした。この日はパンダキャンプによく泊りに来るとい、バンコクで働いている大島さんとタイ人の奥さんも来られていて、一緒に手伝ってもらった。

あわただしい昼を済まし、全員で記念写真を撮った。



昼からはゴメさんの陸稲の話である。参加者は15人ほどいただろう。前日、日本の陸稲の状況がどういものかゴメさんから聞いていたので、コンピューターの調整中に、簡単に訳して話した。タイ人も陸稲はあまり食べないようだが、カレン族やほかの民族では重要な位置を占めている。



今回のゴメさんの取材も去年のように丁寧なものだった。陸稲を作っている人を探し当て、インタビューしたり、貴重なモミを入手したり、陸稲を使ったおかきの会社を訪ねたりしている。

日本人はもう誰も陸稲を食べてはいないようだが、戦前には陸稲栽培が奨励されていたという事実も突き止めている。

なかなか興味ある話が続いたが、ゴメさんには申し訳なかったが、上手く訳せないところがあった。

結局日本人は現在陸稲を食べていないので、さまざまな製品を持ってくるわけにもいかず、陸稲を使ったおかきは食べてもらったが、日本の陸稲はモチなので、赤飯を作ったり、お汁粉を作ったりして、参加者に日本のモチを使った食べ物を味わってもらった。

ワークショップが終わってから、参加者の一人タヌさんの「足るを知る農場」に行くことになった。私たちだけでなく、参加した人、大島夫婦も一緒だった。そこまではパンダキャンプから南の方向にちょっとあった。

池を中心に野菜や果樹、水稻（水が枯れてくれば陸稲）が植えてあり、池にはナマズやテラピアを養殖し、アヒルも飼ってあった。

私たちは魚釣りをさせてもらった。釣れるのはナマズだったが、ゴミさんのみテラピアを 2 匹釣り上げた。



▲ナマズを釣り上げた喜びの 2 人。左から剛くん、ゴミさん、シリボンさん。

タヌさんにこれが「チャオム」と説明してもらったときはこれがそうかと思った。大学の学食で、この葉を混ぜたタイ風の卵焼きをよく注文するのだが、葉を口に含むと香ばしいにおいがして、料理を作るために素材を組み合わせるタイ人の味覚に素晴らしいものを感じた。

タヌさんはバンコクで 13 年タクシードライバーをして、ここにきて 9 年になるといついた。



ポンティップはパンダキャンプに残っていたが、電話をしてきて、今ひどい雨が降っていると知らせてきた。30 分ほどして、こちらもひどい雨に見舞

われたが、この農場は橋の下から別の方角に伸びているので、その橋の下で雨宿りをした。

この機会にあまり話が出来なかった、これからバンコクへ帰るといふ大島さんと話した。

足るを知る農場での収穫物は欲しい人にただであげているというので、私たちも魚をもらって帰ったが、どこへいったのか食卓には出なかった。

しかし、その夕食の前にコウモリの揚げ物が出た。今朝、ノーさんが持って来ていたやつだ。その時、ちらっと顔を見たが、まだ生きていて顔が犬のようで、なかなかかわいい顔をしていたが、こんなことになってしまった。

卓に出てきたからには、食べないわけにはいかないが、誰が食べるかといえば、去年、タランチュラのようなクモを食べた人たちになる。剛くんも私もただあっけにとられて見ていただけだった。



この日の夕食もおいしいものだった。タヌさんもいたし、昔、シリボンさんと一緒だった職業学校の先生、トゥー先生一家もいた。

その夜も 11 時過ぎまでワイワイ話をしていましたが、結局何を話したのか忘れてしまった。しかし、このワイワイが楽しいのである。

8月13日

今日から二泊の予定でフーワイカーケーン野生動物保護区である。シリボンさんの運転するピックアップ・トラックの荷台にはノーさん、剛くん、それに氷詰め金の虎の子ビールが乗った。

ちょっと、シャワーが来た。しかし、ちょっとでよかった。

最初に保護区内にある飼育センターへ行った。ここには復帰して森に帰るのを待っている動物もい

るし、それが出来ず、ここで飼われている動物もいる。

ここへはずっと前一度来たことがあるが、相変わらず受付もなく、不愛想なことこの上なかったが、シリポンさんが事務所に声掛けをしたら、このセンターの人が案内に出てこられた。



最初に案内してもらったのがマレーグマの檻。子供の時、人に飼われていたのをここが引き取って育てているという。



私を引き付けたのはうすくまってひっそりいた Leopard cat だった。タイにはトラやヒョウをはじめ、野生のネコ科の動物は 9 種類いるが、このネコはその中で一番小さく、家ネコとそれほど変わらないという。



案内の人の後をだらだら追っていたら、目の前の看板の上にカササギサイチョウが止まっていた。まるで人形のようなだった。



次は少し離れた木にオオサイチョウ。向かいにセンターの動物に食事を提供する台所のようなところがあり、どうも何かをつまみ食いに来ているのだ。



オオサイチョウはコソ泥をしても、間近で見れば威厳があり、風格がある。しかしそれよりも正面からその飛翔の羽の一連の動きを見れば、その美しさに魅せられてしまう。

私たちは酔ったようにトラの檻に移った。特別地域のように、電流線のプラグを抜いてから、二重の門を開けて中に入った。

ここにはベンガルトラが 1 匹とタイのトラが 3 匹いる。このサイトで有名なクロン・コーとメスのナパーをカップルにしようと隣り合わせの檻に放しているが、まだ成功はしていないようだ。

動物園と違って、金網を隔てて顔を突き合わせるほど近づけるので、トラの息遣いも迫力がある。



その後、ヤマアラシを経て、遠くに白っぽいテナガザルのいるところに行った。

この個体はメスだそうで、一度配偶者選びに失敗したのだが、どこからか二度目の機会が訪れるように、敷地の外れにある、回りを水に取り囲まれた島のような所にある木に放されていた。



センターの人の話で、9年前にここの保護区で保護されたと聞いたとき、私たちは昔、子供のテナガザルを抱かしてもらったことを思い出した。あの時のテナガザルなのだ。体に抱きついてきたときの感触が蘇ってくるようだった。



▲テナガザルの赤ちゃんをだっこする若林さん
(2010年 フーワイカーケーンにて)

その後遠くのもの陰でタイ語でリエン・パーと呼んでいるカモシカの仲間の姿も見た。他にもスア・ファイと呼んでいる Asian golden cat もいるそうだが、それは見せてもらえなかった。残念だった

が、これでも十分なものを見たと思った。

宿泊所に着いたのが1時を回っていた。昼を食べていないので、どうするのだろうかと思っていたら、シリポンさんの交渉上手で、川のほとりの食堂で食べられることになった。

食堂の近くの木に大型のトカゲがいるのを誰かが見つけた。さっそく、カメラの集中砲火を浴びせたが、タイ語でタクワットと呼んでいる陸生のトカゲで、1メートルは優に超える大きさだ。



そうこうしているうちに天候が崩れてきた。食堂の屋根の下にいと、川沿いに少し大きめのカワセミ、コウハシショウビンが飛んできたので、一旦は何もかもそっこのけの状態、この鳥にかかりっきりになった。



食後の予定は野生動物の観察塔。ここの職員のリンさんに今年も案内してもらった。今回は行った時間が遅かったため、時間延長してもらって5時半ごろまでいたが、クジャク以外には陸上動物はイノシシー頭だけだった。

イノシシは悠然と歩いていたので、カメラの被写体が欲しい私たちは、仕方なく撮るより方法がなかった。



しかし、距離はあったが枯れ木に止まった 2 羽のハト、キアシアオバト (Yellow-footed Pigeon) は後で調べてみると、簡単にはお目にかかれない鳥だった。



リンさんの指摘がなかったら、私たちの初めての鳥にはならなかったかもしれない。



▲観察塔 ブラインドから観察。写真撮影。
帰りは両側の森に注意しながら帰る。サンバーティアー、ホエジカが顔を見せた。



川辺の食堂で夕食を食べ、宿泊所に戻る。宿泊所は二部屋あったが、私たちに一部屋あてがってもらったのは大変ありがたく、又心苦しかったが、後に起こったことを思うとこれでよかったとも思った。

例によって何人かは浴びるほどビールを飲みながら、玄関にあるテラスでよもやま話を続けた。



以前、ノイさんがジャコウネコをおびき寄せて、我々に写真を取らせてくれたが、いつ餌に来たかを知らせるため、ビール缶を数珠つなぎにして、餌につけてくれた。今回も同じ試みをしたが、ほとんど鳴らず、少し鳴っても起きていこうという気にもならず、情熱の冷めやすい世の常の心の内を実感した。

夜は電気が止まってしまうが、窓を開けていれば、涼しいぐらいで、十分寝ることが出来た。



▲食堂 川沿いで鳥や動物等の観察ポイントでもある